

# 京都府埋蔵文化財情報

## 第136号

平成30年度京都府内の埋蔵文化財の調査	村田和弘	1
共同研究 軽石考2 - 丹後の遺跡から見た 日本海流域における軽石の流通 -	引原茂治・小池 寛	7
資料紹介 宇治市一本松古墳の埴輪とその年代	桐井理揮	13
資料紹介 東園家邸跡出土の禁裏御用品 - 平安京左京北辺三坊五町の調査成果から -	加藤雄太	19
平成30年度発掘調査略報		23
11. 美濃山遺跡第8次		
令和元年度発掘調査略報		27
1. 木津川河床遺跡第32次		
長岡京跡調査だより・132		28
現地公開(令和元年度上半期)		30
普及啓発事業(令和元年度上半期)		31
センターの動向		33

2019年10月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

# 平成30年度京都府内の埋蔵文化財の調査

村田和弘

## 1. はじめに

平成30年度に当調査研究センターが実施した発掘調査は、事業件数15件(調査遺跡は18遺跡)を数える。事業内容は昨年度に引き続き、新名神高速道路整備事業と国営農地整備事業が大きな割合を占めている。また、丹後地域では小規模な発掘調査を含め4件実施しており、近年発掘調査事例が増加している。このほか平成29年度までに調査を終了した事業について報告書刊行を行った(『京都府遺跡調査報告集』第177・178冊)。

以下、当調査研究センターの事業を中心に平成30年度に京都府内で実施された主な発掘成果について概観することとしたい。文末に調査機関を付した。

## 2. 各時代の調査成果

### (1)旧石器時代・縄文時代

京丹後市上野遺跡では、始良丹沢火山灰が検出された。また、後期旧石器である台形石器が出土した。同平遺跡では、縄文時代中期から晩期の土器や石器が出土するとともに、昭和37年に同志社大学と帝塚山大学が調査したトレンチの位置を確認した(当調査研究センター)。

城陽市小樋尻遺跡では、中世の鳥畑の下層で、縄文時代晩期の土器や石器が出土した(当調査研究センター)。

### (2)弥生時代

京丹後市奈具遺跡では、丘陵斜面で弥生時代中期から後期の土器や石器、水晶片などが多量に出土した(京都府教育委員会)。

### (3)古墳時代

京丹後市網野町所在の史跡銚子山古墳(古墳時代前期)では、今回初めて後円部の調査が行われ、墳頂部から裾まで葺石が良好な状態で遺存していることがわかった。また、墳丘のテラス面には細かな石が敷き詰められ、丹後型円筒埴輪の埴輪列を検出した(京丹後市教育委員会)。

亀岡市春日部遺跡では、古墳時代前期から中期の竪穴建物4基、後期の竪穴建物2基を検出した(当調査研究センター)。

城陽市史跡久津川車塚古墳(古墳時代中期)の調査では、周壕を渡るために造られた渡り土手を確認した。土手は地山を削った後に盛り土をして造られ、土手の上には5cm大の石が敷き詰められ、両斜面には葺石と同じ大きさの石が敷かれていた。出土遺物には、円筒埴輪や朝顔形埴輪、



城陽市芝山遺跡L地区全景(西から)

水鳥形埴輪などがある(城陽市教育委員会)。

城陽市芝山遺跡で、新たに見つかったI-17号墳は、直径9.5mの円墳で、木棺直葬の埋葬施設には須恵器や鉄製の鏃などが副葬されていた(当調査研究センター)。

#### (4) 飛鳥・奈良時代

宮津市安国寺遺跡は、阿蘇海沿岸の扇状地に立地する奈良時代から平安時代にかけての遺跡である。今回の調査では、奈良時代の和同開珎・萬年通宝・神功開宝が合わせて31枚以上、紐を通した状態で出土した。これらの銭貨の組み合わせが出土する例は長岡京が造られた時期にみられ、丹後地域でこれほどの枚数が一度に出土するのは初めてである(宮津市教育委員会)。

木津川市史跡恭仁宮跡(山背国分寺跡)の調査では、約3m(10尺)間隔で東西に並ぶ柱穴列を確認した。柱穴列は大極殿院の南面を区画する掘立柱塀と考えられ、従来の想定よりも南側に位置していることがわかった。今回の調査によって、大極殿院南面の区画施設が築地回廊ではなく、簡素な掘立柱塀であったことがわかった(京都府教育委員会)。

木津川市岡田国遺跡では、奈良時代から平安時代中頃にかけての掘立柱建物を複数棟検出した。建物には重複関係があり、建て替えが行われたと考えられる(当調査研究センター)。

八幡市美濃山遺跡では、飛鳥時代から奈良時代の掘立柱建物27棟や焼土坑、木炭窯などを確認した。遺物では、土師器や須恵器、土馬などのほか、瓦片・ひさご形土製品など美濃山廃寺と同じものが出土したことから、関連が考えられる(当調査研究センター)。



木津川市岡田国遺跡調査地南半部全景(南から)

### (5)長岡京期

長岡京跡右京第1177次調査は、右京六条三坊三町の南西部にあたり、大型の掘立柱建物とそれに付属する建物、柵、区画溝などを検出した。建物の配置から2町以上の宅地である可能性が高い。大型の掘立柱建物は、桁行7間(21m)、梁行2間(9m)の南北方向の建物で、長岡京跡で検出されている建物としては最大級規模である。宅地は、区画溝と塀によって区画され、大型建物が中心となる内郭と、その他の建物が配置される外郭に分かれる。出土した遺物には瓦が多く、東院や諸院などの限られた施設で使用された、勅旨所の「旨」の異体字を施した瓦が多数出土した。長岡京期後半の重要施設と考えられ、長岡京における宅地利用を考える上で重要な資料である(長岡京市埋蔵文化財センター)。

長岡宮跡第525次調査は、長岡宮の東端部で調査し、東一坊大路の西側溝を確認した。溝は幅約2m、深さ0.3mで多量の土器や凝灰岩の切石などが出土した。遺物では、須恵器や土師器、墨書土器、円面硯などのほか、長岡京では出土例が少ない須恵器・注口付鉢が出土した(向日市埋蔵文化財センター)。

### (6)平安時代

平安京右京七条一坊十二町跡の調査では、平安時代前期から中期かけての掘立柱建物や井戸、溝、土坑のほか緑釉陶器の皿を埋納した地鎮跡を検出した(京都市埋蔵文化財研究所)。

亀岡市春日部遺跡では、平安時代後期の掘立柱建物3棟やそれらを囲う溝を検出した。溝は直角に屈曲し、西南隅付近に土橋をもつ。建物群を囲う溝と考えられ、在地有力者の方形居館と考



京丹後市丹波丸山古墳群経塚S X14検出状況(南から)

えられる(当調査研究センター)。

与謝野町梅谷遺跡では、平安時代末から鎌倉時代の柱穴や土坑、流路などを検出した。柱穴の多くは柱材や礎石が遺存していた。また、土師器皿が4、5枚埋められた柱穴もあった。植物の種子と一緒に出土していることから、柱を抜き取った後に埋納したものと考えられる(与謝野町教育委員会)。

#### (7)鎌倉時代・室町時代

京丹後市丹波丸山古墳群の調査では、古墳関連の遺構は確認できなかったが、13世紀頃の中世墓や経塚などの遺構を検出した(当調査研究センター)。

亀岡市犬飼遺跡では、幅約8mの「L」字状に屈曲する2条の堀などを検出した。調査は令和元年度に継続して実施している(当調査研究センター)。

京都市鹿苑寺(金閣寺)では、舍利殿と鏡湖池の南側に広がる池状の地形(南池跡)のようすを明らかにするための調査が行われた。調査の結果、南池は室町時代中期の北山殿の造営とともに造られたことがわかり、周囲には堤や島状の高まり、礎石建物などを検出した。また、池底には水が張られた形跡がないことなどから、未完成の庭園であった可能性がある(京都市埋蔵文化財研究所)。

城陽市水主神社東遺跡や同小樋尻遺跡では、これまでの調査に加えて、新たに多くの島畑を確認した(当調査研究センター)。



亀岡市春日部遺跡溝空撮遠景(平安時代遺構面・東から)

#### (8)安土・桃山時代～江戸時代

京都市伏見城跡の今回の調査地は、江戸時代の初めごろに描かれた『伏見御城櫓并屋敷取之絵図』には「下野守」の屋敷地と記されている地点にあたる。調査では、伏見城の城下町が造営された16世紀末から17世紀初頭の石垣や石畳、階段が検出された。これらは屋敷の西側の石垣と入り口である階段と考えられ、8段分を検出した。伏見城跡で階段が確認された例は少なく、貴重な事例である(京都市)。

#### (9)暫定登録文化財

京都府が平成29年度に創設した制度で、将来、国指定や府指定・登録文化財になる可能性のあるものも含まれる。平成30年度は、建造物や美術工芸品、有形民俗文化財など合計133件が登録され、このうち考古資料については、亀岡市穴太古墳出土の筒型銅器や寺町旧域(鴨沂高校)出土の京焼茶道具など7件が登録された。

### 3. おわりに

平成30年度の京都府内の代表的な発掘調査成果と、暫定登録文化財について概観した。発掘調査については、ここで取り上げた以外にもさまざまな機関で実施されており、その全てを紹介するには至らないが、国民共有の財産である埋蔵文化財に関する情報を後世に残していくため、日々取り組まれていることを伝えたい。



亀岡市犬飼遺跡全景(鎌倉～室町時代遺構面・上が北)

また、暫定登録文化財制度について、今後も埋蔵文化財の登録、さらには指定が増加することに期待したい。

最後に、当調査研究センターでは、京都府内の発掘調査の速報展として「発掘された京都の歴史」を開催している。また、「埋蔵文化財セミナー」や各種体験講座の実施、普及啓発紙の「もっと知りたい京都の歴史」の刊行を通じて、今後とも埋蔵文化財への理解を深めていくため情報発信を行っていきたい。

(むらた・かずひろ＝当調査研究センター調査課調査第1係長)

## 軽石考 2

－丹後の遺跡から見た日本海域における軽石の流通－

引原茂治・小池 寛

### 1. はじめに

かつて、精華町森垣外遺跡から出土した軽石について、共同研究「古墳時代中期における石製品の生産と流通」を行った。これに伴い、塩や滑石の産地である和歌山県の海岸部で軽石の採集を行い、太平洋に面した県西半部の海岸でも多数の軽石を採集した。これにより、塩や滑石と同様に、軽石も大和政権のもとに集約され分配された可能性を指摘した。<sup>(註1)</sup>

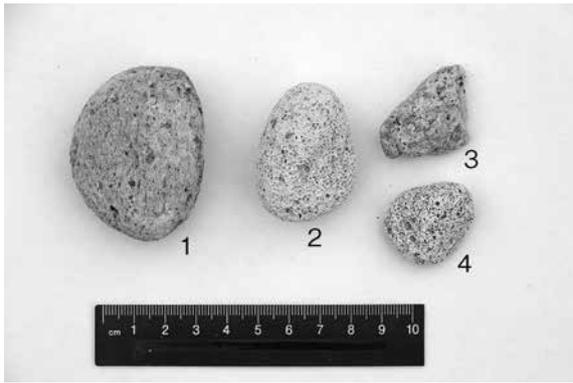
女布遺跡は、日本海側に位置する遺跡である。京丹後市久美浜町で実施した女布遺跡第3次調査で、竪穴建物から軽石が出土した。今回は、太平洋側と同様に、日本海の海岸部でも軽石が漂着し、採集することができるのか、また、採集地と遺跡との関連を確認するために、京都府北部の丹後地域の日本海側の海岸で、軽石の採集を実施した。

### 2. 軽石の採集について

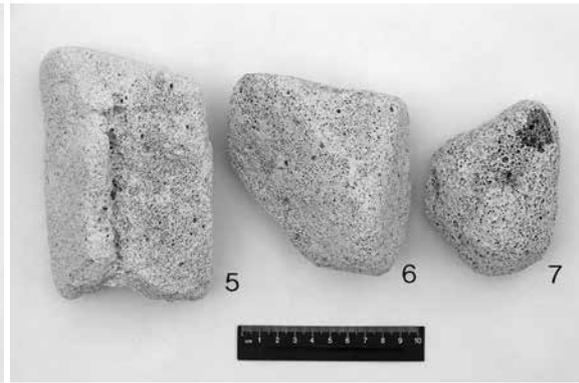
今回は、舞鶴市から京丹後市にかけての海岸部で採集を行った。第1図に示したのは、実際に軽石の採集ができた地点である。宮津市の栗田半島や丹後半島東側の天橋立から伊根町にかけて



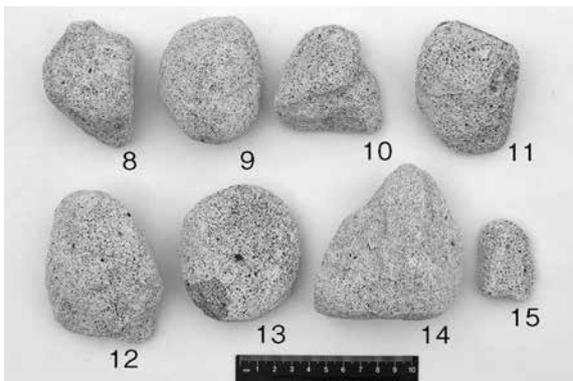
第1図 軽石採集地点及び遺跡位置図



神崎



丹後由良1



丹後由良2



久僧松島浜



平



竹野漁港

も、数か所で採集を試みたが、軽石の散布はなかった。

採集できたのは、まず、舞鶴市神崎と宮津市丹後由良である。府北部の代表的河川である由良川河口を挟んで、東西に位置する。日本海の外洋に面した海岸である。また、丹後半島西側の京丹後市丹後町から久美浜町にかけての海岸部でも、多くの地点で採集ができた。いずれも、日本海の外洋に面した海岸である。このようにみると、外洋に面した海岸では、軽石が漂着する可能性が高いが、丹後半島で外洋から遮られた宮津湾周辺では、漂着がみられない、もしくは少ないという傾向がうかがえる。

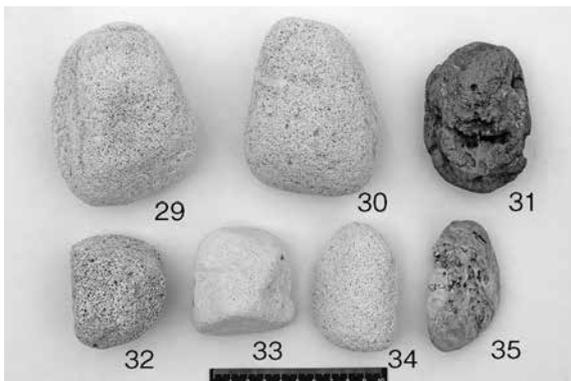
①舞鶴市神崎 由良川河口の東側に位置する海岸である。若狭湾に面している。採集できた軽石は4点である。長さ3～5cmの小形から中形のものである。色調は灰白色を呈し、多孔質である。



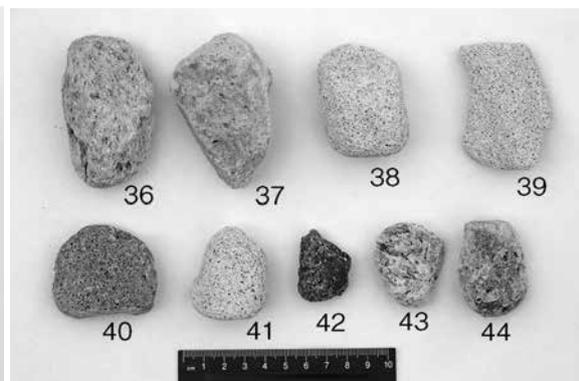
後ヶ浜



浅茂川八丁浜



小天橋葛野浜1



小天橋葛野浜2

②宮津市丹後由良 由良川河口の西側に位置する海岸である。神崎と同様、若狭湾に面している。採集した軽石は11点である。長さ10cmを超える大形のものも含まれる。色調は灰白色で、多孔質である。部分的に茶褐色を呈する部分を持つものがある。

③京丹後市丹後町久僧松島浜 丹後半島の先端近くに位置する海岸である。日本海に面している。採集した軽石は4点である。長さ10cmを超える大形のものもあるが、小型のものが主である。色調は灰白色のものと明褐灰色のものがある。灰白色のものは、やや赤味を帯びる。多孔質であるが、孔はやや小さい。

④京丹後市丹後町平 久僧松島浜の西側に位置する海岸である。日本海に面する。付近には、縄文時代の集落遺跡である平遺跡がある。採集した軽石は4点である。長さ3～5cmのものである。色調は灰白色である。多孔質である。

⑤京丹後市丹後町竹野 丹後半島を南北に貫流する竹野川の河口の西側に位置する海岸である。竹野漁港の周辺である。海岸壁には玄武岩の柱状節理が露頭する。日本海に面している。採集した軽石は8点である。長さ13cmを超える大形のものも含まれる。その他は、長さ2.3～6.5cm、幅1.9～4.5cm、厚さ1.4～3.0cmを測る小～中形のものである。色調は灰白色を呈するものが主で、灰色系のものもある。多孔質であるが、孔はやや小さめのものが多い。

⑥京丹後市丹後町後ヶ浜 竹野川河口の東側に位置する海岸である。日本海に面している。付近には玄武岩の柱状節理が見られる立岩がある。南東側には間人市街地が展開する。採集した軽石は2点であるが、長さ13cmを超える大形のものも含まれる。色調は灰白色で、多孔質である。

付表 軽石法量表

番号	採集地	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	色調
1	舞鶴市神崎	5.5	4.4	2.7	灰白(7.5Y8/1)
2		4.6	3.3	2.5	灰白(5Y8/1)
3		3.4	2.5	1.4	灰白(N8/)
4		3.0	2.5	1.6	灰白(5Y8/1)
5	宮津市丹後由良	14.2	8.6	7.3	灰白(7.5YR8/1)
6		13.2	9.9	7.3	灰白(7.5YR8/1)
7		9.8	7.3	5.7	灰白(10YR8/1)
8		7.4	5.7	6.1	灰白(10YR8/1)
9		7.0	5.8	5.2	灰白(7.5YR8/2)
10		6.7	6.6	4.8	灰白(7.5YR8/1)
11		7.9	6.0	5.3	灰白(10YR8/1)
12		9.6	6.7	5.0	灰白(10YR8/1)
13		7.8	6.8	3.6	灰白(5Y8/1)
14		8.8	8.8	5.7	灰白(5Y8/1)
15		4.7	3.3	1.9	灰白(10YR8/1)
16	京丹後市丹後町久僧松島浜	10.4	7.2	4.2	灰白(5YR8/1)
17		4.0	2.8	2.0	灰白(5YR8/1)
18		3.3	2.7	1.4	明褐灰(7.5YR7/1)
19		3.4	2.9	1.9	灰白(5Y8/1)
20	京丹後市丹後町平	5.3	3.6	2.2	灰白(10YR8/1)
21		4.8	3.4	2.7	灰白(N8/)
22		3.0	2.5	2.1	灰白(5Y7/1)
23		4.3	2.9	1.2	灰白(2.5YR8/2)
24	京丹後市丹後町竹野漁港	13.8	11	7.7	灰白(5YR8/1)
25	京丹後市丹後町後ヶ浜	13.8	7.2	7.0	灰白(7.5YR8/1)
26		4.7	3.6	2.3	灰白(7.5YR8/1)
27	京丹後市網野町浅茂川八丁浜	5.0	4.6	3.2	灰白(10YR8/1)
28		5.5	4.7	1.9	灰白(7.5YR8/1)
29	京丹後市久美浜町小天橋葛野浜	10.5	8.4	7.3	灰白(10YR8/1)
30		10.1	7.9	6.5	灰白(10YR8/1)
31		8.1	5.4	4.0	にぶい褐(7.5YR6/3)
32		6.5	6.4	5.5	灰白(5Y8/1)
33		6.4	6.0	5.8	灰白(7.5YR8/1)
34		7.5	5.0	3.8	灰白(10YR8/1)
35		7.5	4.3	2.4	浅黄橙(10YR8/3)
36		7.2	4.6	3.7	灰白(2.5YR8/1)
37		7.5	4.9	3.4	灰白(5Y8/1)
38		5.5	4.0	3.7	灰白(10YR8/1)
39		6.4	4.7	2.2	灰白(10YR8/1)
40		5.0	4.4	2.5	灰(5Y6/1)
41		4.4	3.8	3.2	灰白(10YR8/1)
42		3.5	3.0	1.9	灰(10Y5/1)
43		4.2	3.6	1.8	灰白(5Y8/1・5Y7/1)
44		4.7	3.4	2.4	灰白・灰(10YR8/1・10Y5/1)

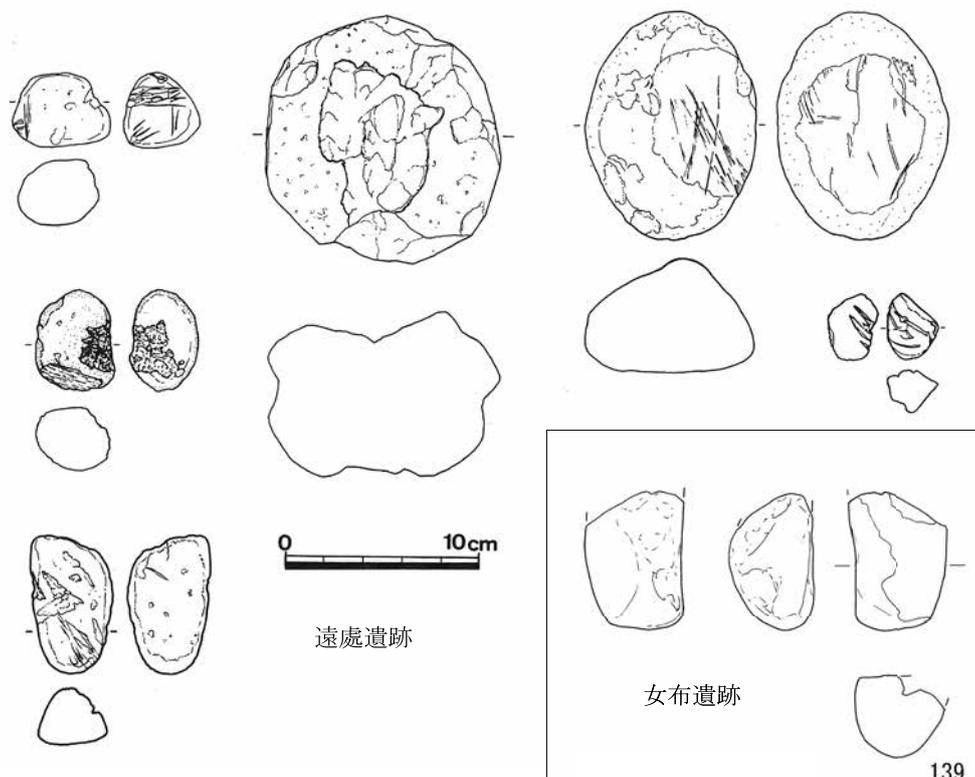
⑦京丹後市網野町浅茂川八丁浜 網野市街地の北西側の浅茂川河口に位置する海岸である。日本海に面する。採集した軽石は2点である。色調は灰白色を呈し、多孔質である。

⑧京丹後市久美浜町小天橋葛野浜 砂嘴である小天橋の日本海に面した側に位置する海岸である。東側は、網野町夕日ヶ浦に至るまで、海岸線が続く。函石浜遺跡などもこの海岸線上に位置している。採集した軽石は29点である。長さ10cm前後の大形のものも含まれる。灰白色で多孔質のものが多い。色調では灰色、にぶい褐色、浅黄橙色のものも含まれる。この海岸の南側内陸部には女布遺跡が位置しており、軽石が出土している。女布遺跡出土の軽石は、にぶい褐色系のものに近似している。

### 3. まとめ

女布遺跡出土の軽石は、弥生時代後期後半頃の竪穴建物の床面付近から出土している。<sup>(注2)</sup> 竪穴建物に伴う遺物と言える。軟質な材質であり、積極的に使用痕や加工痕が認められるものではなく、用途は不明としか言いようがない。

丹後地域では、女布遺跡のほかにも、弥栄町遠處遺跡から軽石が出土している。<sup>(注3)</sup> 遠處遺跡は古墳時代後末期から古代にかけての製鉄遺跡として知られている。切り目などの加工痕があるものもあり、浮子と報告されている。また、遺跡の性格上、工具などの軽微な研磨に使用された可能性も考えられよう。このほか、未報告ではあるが、舞鶴市大川遺跡からも出土していることを調



第2図 遺跡出土軽石実測図

査担当者からご教示いただいた。

女布遺跡は、軽石の採集できた小天橋葛野浜から10km前後の内陸部に位置する。このような距離感は、徒歩でも日帰りの採集が不可能ではないことを示唆する。また、遠處遺跡と竹野川河口の竹野や後ヶ浜との距離感、大川遺跡と神崎や丹後由良との距離感も、ほぼ同様と考えられる。このことは、上記遺跡出土の軽石は、直接海岸で採集されたものと考えの方が妥当性が高いことを物語る。この点は、近畿内陸部出土の軽石とは相違するものである。

丹後(和銅6(713)年までは丹波)は古くから大和と関係が深かった地域と言われる。日本海側で最大規模を誇る前方後円墳である網野町網野銚子山古墳や丹後町神明山古墳、「記紀」の記述などが、それを物語る。このような丹後と大和の関係を考えると、和歌山県での共同研究で想定したように、丹後の軽石も、大和へもたらされていた可能性も想定できるのではないか。火山活動が活発な地域では、軽石は身近にまた容易に入手できるが、近畿地域はそのような環境にない。律令期の租庸調の調のように、丹後から大和へもたらされて、分配された可能性も考えられるのではないか。ただ、軽石の出自が明確でない現状では、想定の外を出ない。

(ひきはら・しげはる=当調査研究センター調査課調査第1係副主査)

(こいけ・ひろし=当調査研究センター調査課長)

注1 小池 寛・引原茂治「軽石考」(『京都府埋蔵文化財情報』第113号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010

注2 「平成27~30年度府営農業競争力強化基盤整備事業女布地区関係遺跡発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第177冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2019

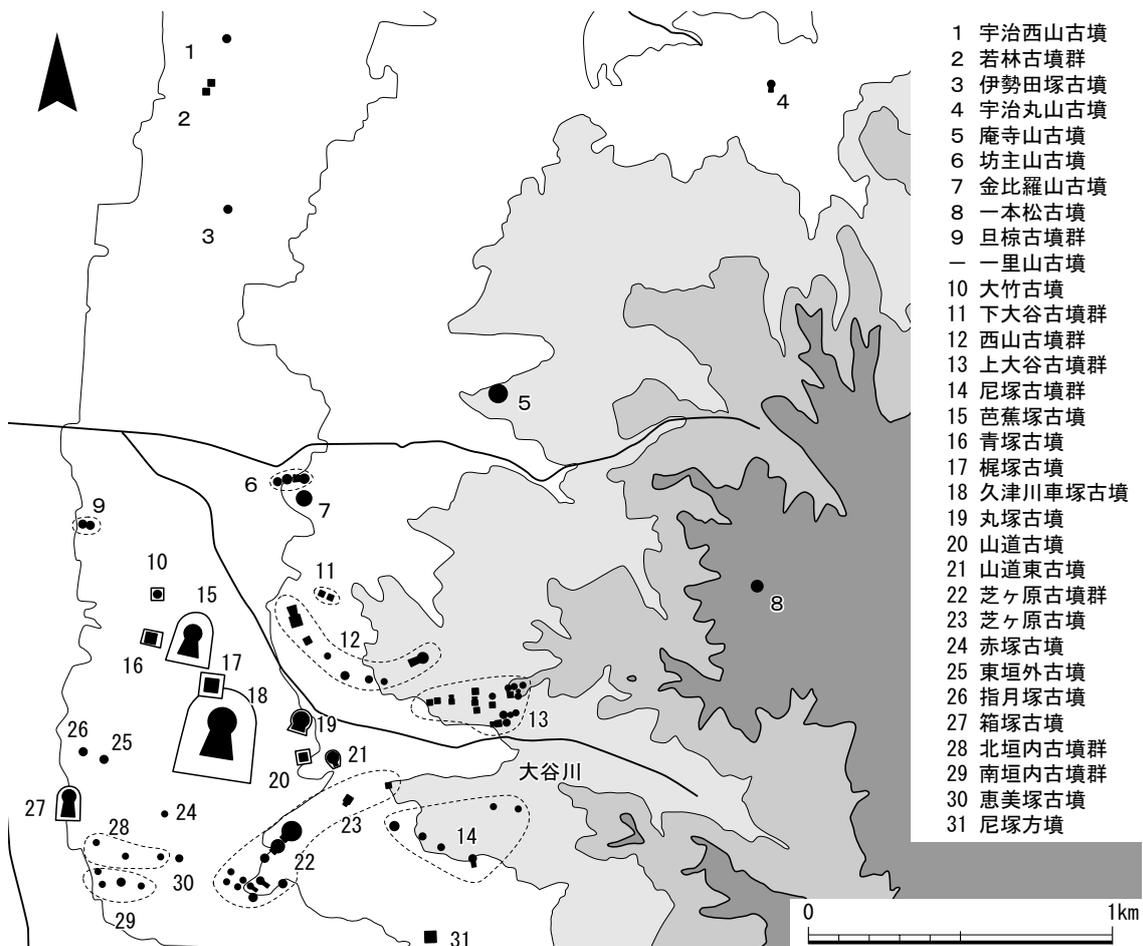
注3 「遠所遺跡発掘調査報告書」(『京都府遺跡調査報告書』第21冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997

## 宇治市一本松古墳の埴輪とその年代

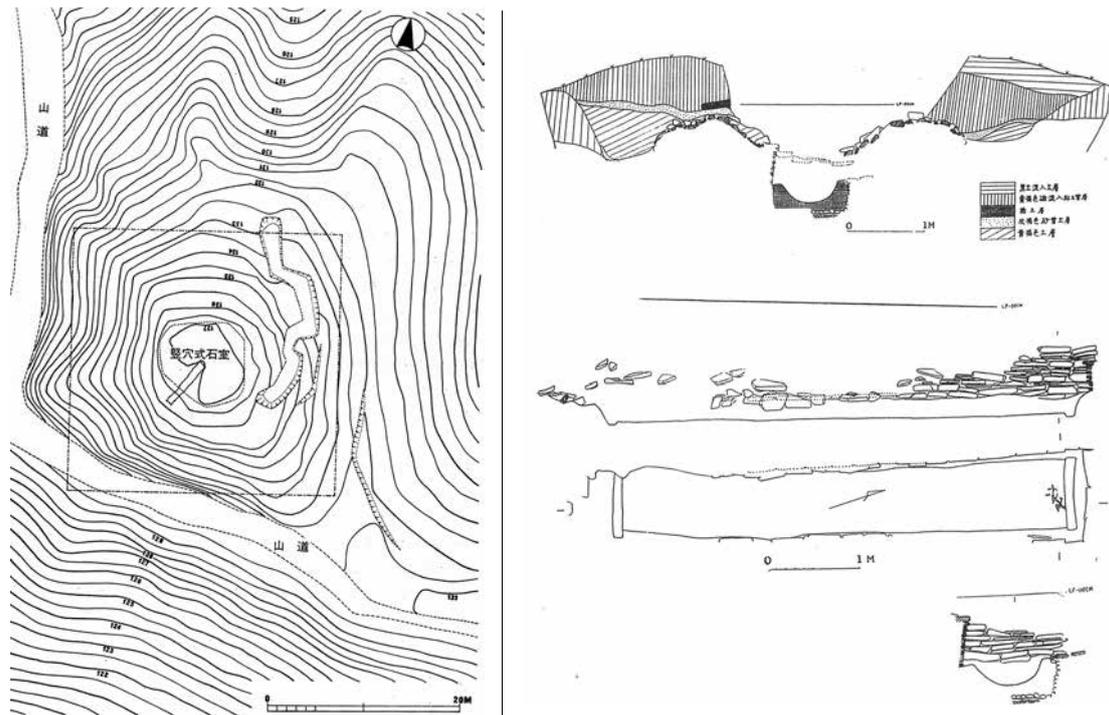
桐井理揮

### 1. はじめに

一本松古墳は宇治市広野町尖山に位置する前期古墳である。久津川古墳群広野支群に属し、古墳群中唯一丘陵頂部に立地する。1965年に山田良三によって発掘調査が行われ、翌年に調査概要が紹介された。<sup>(注1)</sup>それによると、古墳は直径35mの葺石を持たない円墳であり、竪穴式石室から平縁式鏡の鏡片や管玉、鉄製農工具類や鉄剣が出土したとされ、4世紀代の古墳であると評価された。その後、宇治市教育委員会による測量調査が行われ、1辺28mの方墳である可能性が示されたが、現地形の改変が著しく、本来の墳形は明らかではない。<sup>(注2)</sup>また、最初の調査の際に攪乱土中から壺の口縁部とされる土師器や、埴輪片も出土したが、一部のみしか図面が公表されていなかったため、詳細な時期については不明であった。一本松古墳は当初の報告から久津川古墳群中最



第1図 宇治一本松古墳の位置と久津川車塚古墳群



第2図 宇治一本松古墳の墳丘(左：杉本1983)と竪穴式石室(右：山田1966)

古の古墳である可能性が示されるなど、久津川古墳群の成立を考える上で当古墳の占める位置は大きい。

現在、これらの遺物は京都府立山城郷土資料館に保管されている。本稿では、これまで詳細が不明であった土器・埴輪類を改めて観察し、図化することで一本松古墳の位置づけについて考えてみたい。

## 2. 資料の概要

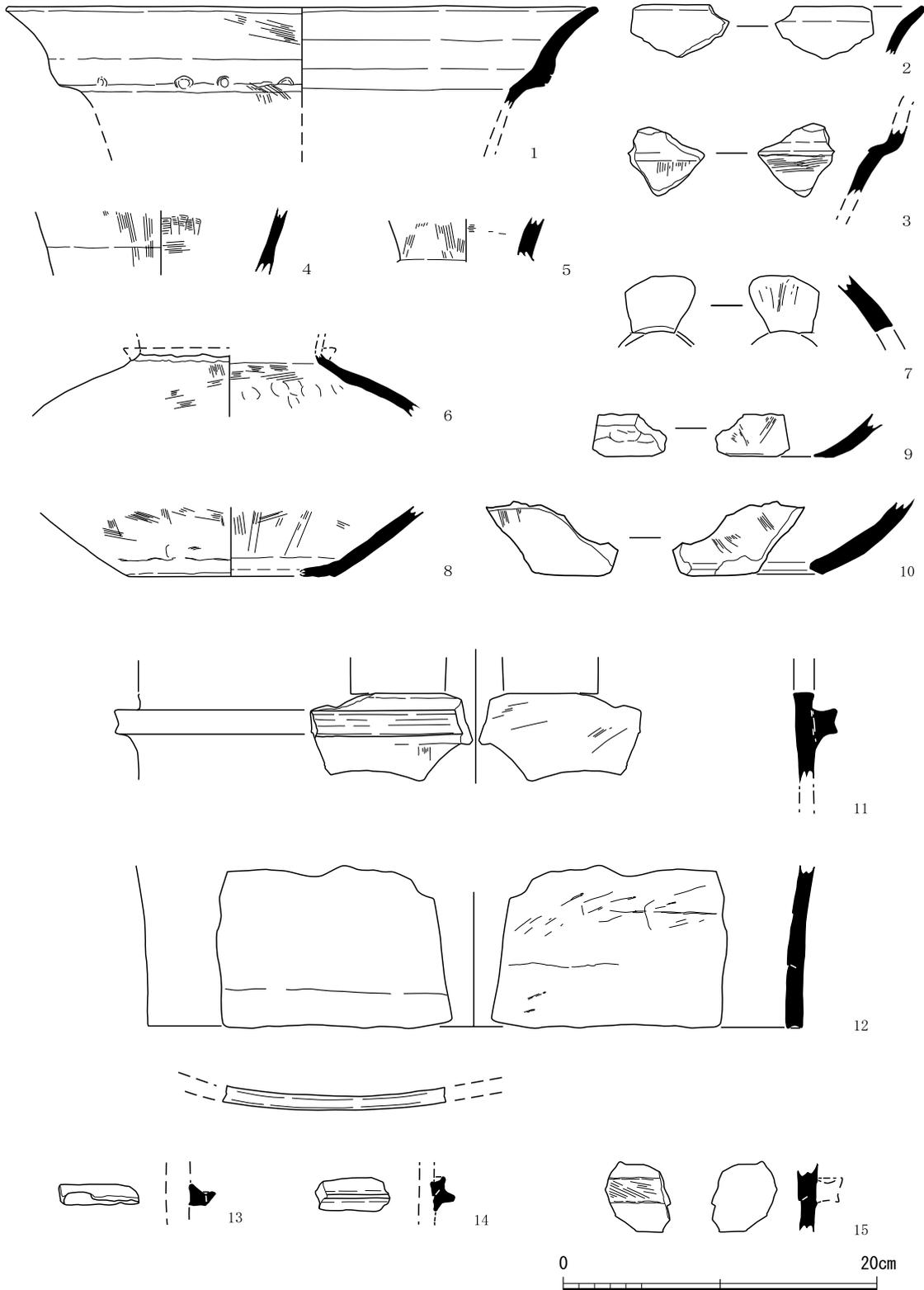
埴輪には壺形埴輪あるいは朝顔形埴輪(1~10)、楕円筒埴輪(11・12)と、不明体部片などがある。総量はコンテナ1箱分であり、墳丘のごく限られた位置にのみ配置されていたと考えられる。

1は二次口縁部であり、短く外反する口縁部の下部には竹管文が認められる。器台形埴輪、あるいは朝顔形埴輪の可能性もあるが、現状で得られている底部片には普通円筒・朝顔形埴輪のものは含まれていないため、壺形埴輪と考えておくのが妥当であろう。頸部以下を欠損するが、通常の壺と比べて口径が著しく大きいことから、頸部が伸長した壺形埴輪である可能性を考えておきたい。2は外反する口縁端部である。朝顔形埴輪や壺形埴輪、あるいは普通円筒埴輪の可能性もあるが詳細は不明である。3は壺形埴輪の頸部~口縁部である。

4・5は頸部である。頸部はいずれもやや外傾気味に直立する形状であり、外面を縦方向のハケ、内面を横方向のストロークの短いハケで仕上げている。6は肩部の破片であり、外面は横ハケで仕上げるのに対し、内面には指頭圧痕が顕著に残り、その上から粗いハケが認められる。また、摩滅が著しく明瞭ではないが、頸胴部の境には本来突帯が貼り付けられていた可能性がある。7は小片ながら、円形あるいは巴形のスカシをもつ破片である。部位により著しく器厚が異なっ

ていることから、壺形埴輪の肩部と考える。内面には弱いケズリが認められる。

8～10は壺形埴輪の底部片である。これらの破片はこれまで同一破片として接合されていたものであるが、再検討の結果、少なくとも3個体が含まれると判断した。なお、底部径や傾きは小



第3図 一本松古墳出土埴輪実測図(1/4)

片のため任意で復元したものである。8は唯一底径を復元できたもので、13.2cmを測る。底部は粘土貼り付けの痕跡を残すなど調整が及んでおらず、わずかな平坦面を持ち、端部は指ナデによって丸く単純に終わる。穿孔した痕跡は認めえず、本来的に開口底部であったと考える。8・9はいずれも底部の屈曲部に薄い粘土紐が貼り付けられている。10は底端面に小さな面を持つものであり、焼成前にヘラ等の工具で端面を削り抜くような調整が行われたと考えられる。内外面ともにハケの痕跡が残る。

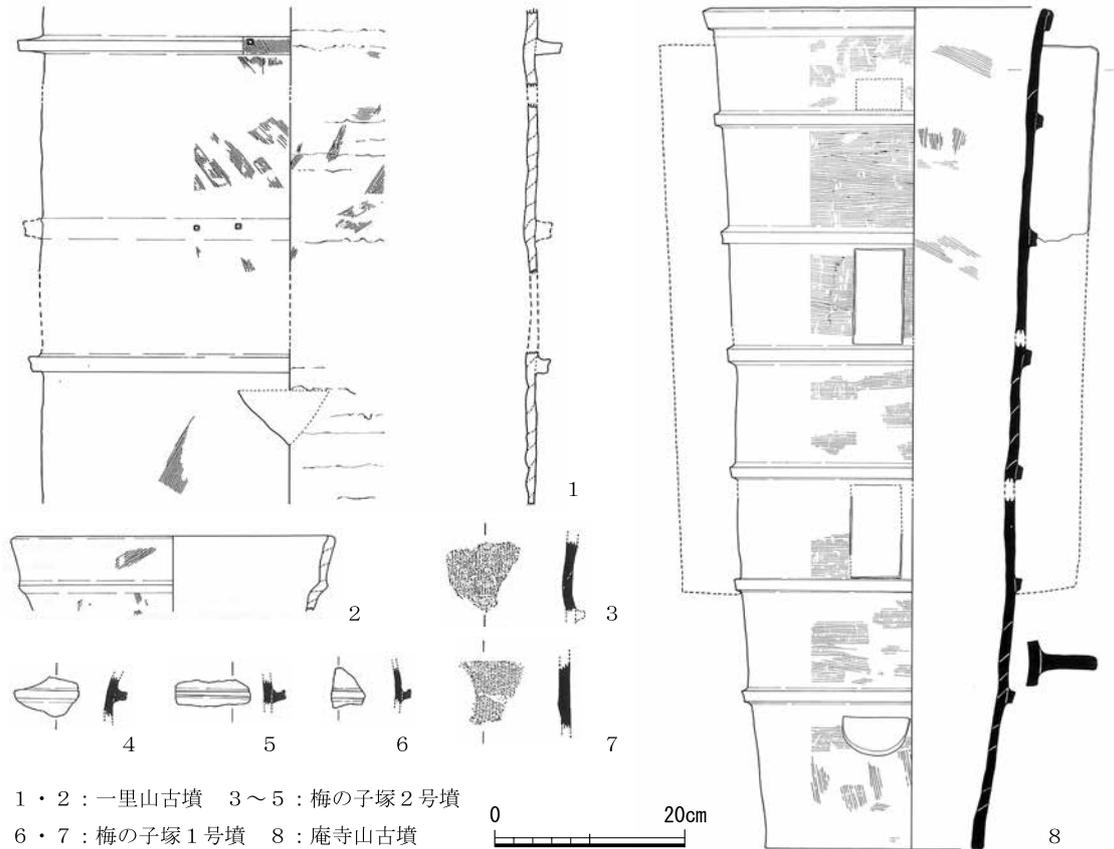
11・12は全形は不明ながら、反りが弱いことから楕円筒埴輪であると考えられる。11は体部片で、断面が「M」字状の突帯をもつ。また、突帯直上には、長方形と考えられるスカシの痕跡を認めることができる。12は底部と考えられる破片である。体部片に比べると器壁は薄く、内面には弱いケズリの痕跡が認められる。底端部はナデによってわずかに凹んでおり、倒立技法で製作されたと考えられる。なお、一本松古墳の北西に位置する一里山古墳では大形の円筒埴輪とされる破片が報告されていることから、これらも大形の円筒埴輪である可能性も残るが、器壁の薄さ、アールの弱さから楕円筒埴輪であると判断した。

13～15は突帯の破片である。13は受口状突帯である。断面方形の突帯に粘土を継ぎ足すことによって受口部を作り出す。14もやや受口状を呈する突帯である。15は突帯が剥離した体部片である。剥離部にはハケが施されるのみで、突帯設定技法の痕跡を確認することはできない。

### 3. 埴輪からみた一本松古墳の位置づけ

一本松古墳はこれまで出土遺物の少なさから、時期的な位置付けが不明確であった。当初の報告では、壺の口縁部とされた破片が茶白山型壺と類似する形状であることや、竪穴式石室の形状から、4世紀代の「古式」の古墳であり、久津川古墳群中最古級の古墳である可能性が示唆された。『前方後円墳集成』では3期に位置づけられたが、埴輪の使用が限定的で葺石も持たないこと、あるいは墳丘の築造企画から、さらにさかのぼって前期前～中葉まで遡上させる意見もある。

今回図化した埴輪は小片が多く、出土状況も不明瞭な点が残るため、やや不安定な資料であることは否めないが、埴輪の組成は楕円筒埴輪と壺形埴輪で構成されており、廣瀬覚による埴輪編年に基づく<sup>(注7)</sup>、I期新相以降であることは確実といえよう。先述のように、以前から知られていた「土師器壺」とされる口縁部(本稿の第3図-1)は、土師器壺の口縁部としてはかなり大形で器壁も厚いなど、通有の土師器壺と異なった特徴を備えている。他に土師器の破片も得られていないことから、本来の壺の形状を逸脱した、器高が伸長した壺形埴輪に復元できる可能性が高い。このような壺形埴輪は豊中市大石塚古墳や茨木市將軍山古墳といったI期新相からII-1期の古墳で出土しており、矛盾はない。また、壺形埴輪の底部に注目したとき、2種の製作技術が認められることは重要である。10のように底端面に面を持つような底部は先述の古墳でも出土しており、整合的ではある。他方、8・9のように開口底部をつくり、底部屈曲部付近に薄い粘土紐を貼りつける手法は伊勢湾岸周辺では散見するものの、近畿地域の壺形埴輪中では一般的な手法とは評価できない。検討の余地は残るが、埴輪生産揺籃期の在地的な手法であると考えておき



第4図 久津川古墳群における前期の埴輪

たい。また、埴輪の全形は不明ながら、受口状突帯が存在することも時期を考えるうえで示唆的である。今回図化した受口状突帯は断面方形の突帯に粘土を継ぎ足すことによって受口部を作り出しており、宝塚市長尾山古墳や京都市・向日市寺戸大塚古墳といったⅠ群埴輪に伴う要素であるといえるだろう。

以上のように、破片資料の断片的な情報ではあるが、一本松古墳の埴輪は廣瀬編年のⅠ期新相に位置づけておきたい。このことは、埋葬施設に定型化した竪穴式石室を持つこと、あるいは有肩鉄斧が、前期後葉以降に出現するとされるⅡ式であることとも矛盾しない<sup>(注8)</sup>。したがって、一本松古墳をことさら古く位置付ける根拠は弱く、集成編年3期でも新しい段階あたりに位置づけておくのが妥当であると考えられる。

久津川古墳群は、北から一本松古墳の属する広野支群、久世支群、富野支群の3支群に分けて捉えられており、前期の埴輪を持つ古墳は、広野支群の庵寺山古墳と一里山古墳、富野支群の梅の子塚1・2号墳が知られている。庵寺山古墳と梅の子塚1・2号墳は鱗付円筒埴輪をはじめⅡ群埴輪が伴うことから、一本松古墳よりも明らかに後出する。他方、一里山古墳の埴輪は出土状況が不明ながら、大形で口縁部が器台形を呈するものなどⅠ群の特徴を有する埴輪が得られている。一里山古墳と一本松古墳では埴輪の製作技術自体に共通性を見出すことができないため直接的な比較は難しいが、一本松古墳に先行するか、ほぼ同時期に属する可能性が高い。これまで広野支群の前期古墳は一本松古墳→庵寺山古墳→金毘羅山古墳と首長系譜が継続すると評価されて

きており、今回の年代観もその築造順序に変更を迫るものではない。しかし、久世支群の西山2号墳や上大谷8号墳など小規模で葺石・埴輪を持たない一群との先後関係はさらに精査する必要がある。ただし、定型化した竪穴式石室を埋葬施設に持つ一本松古墳とは性格を異としており、かつ久津川古墳群最古級の埴輪を有することを鑑みても、当地域における一本松古墳の出現は少なからず意義を有している。

#### 4. おわりに

本稿では一本松古墳の埴輪を取り上げ、その年代的位置づけについて考察した。京都府南部では多くの前期古墳の存在が知られているが、体制が不十分な時期に行われた調査もあり、土器や埴輪については図化すらされていないものも多い。土器・埴輪は、前期古墳研究の現状に鑑みると細片であっても看過できない情報を有している。今回俎上に挙げた久津川古墳群だけでなく、男山丘陵や大住でも同じ時期に埴輪が受容されているようであり、これらの資料を改めて検討することは一定の意義があろう。今後、これらの地域を含めた検討を進めていきたい。

本稿をなすにあたり、京都府立山城郷土資料館の松尾史子氏(当時)、細川康晴氏には資料見学でお世話になった。また、北山大熙氏、上田直弥氏には遺構・遺物について御教示を得た。記して感謝申し上げる。

(きりい・りき = 当調査研究センター調査課調査第1係調査員)

- 注1 山田良三「山城宇治一本松古墳調査報告」(『古代学研究』42・43、古代学研究会) 1966  
注2 杉本 宏「付載 宇治一本松古墳測量調査報告」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第4集、宇治市教育委員会) 1983  
注3 奥村清一郎は全形60mの前方後円墳である可能性を指摘している。(奥村清一郎「よみがえった宇治一本松古墳」(『京都考古』第81号、京都考古刊行会 1996))  
注4 鐘方正樹「宇治市一里山出土の古式円筒埴輪」(『京都考古』第41号、京都考古刊行会) 1985  
注5 近藤義郎編『前方後円墳集成』近畿編 山川出版社 1992  
注6 小泉裕司「第二章 古墳時代の城陽 第一節 古墳の出現」(『城陽市史』第一巻、城陽市史編さん委員会) 2002、同「Ⅱ 久津川古墳群について」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第64集、城陽市教育委員会) 2012、前掲注3文献  
注7 廣瀬 覚『古代王権の形成と埴輪生産』同成社 2009  
注8 野島 永「古墳時代の有肩鉄斧をめぐって」(『考古学研究』第41巻第4号、考古学研究会) 1995

#### 挿図の出典

- 第1図 『山城の二大古墳群』(京都府立山城郷土資料館 2016)の一部を改変  
第2図 前掲注1・2文献  
第3図 筆者実測・製図  
第4図 1・2:前掲注4文献 3~7:小泉裕司「梅の子塚古墳群の調査」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第20集、城陽市教育委員会) 1990、8:杉本 宏「庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第15集、宇治市教育委員会) 1990

## 東園家邸跡出土の禁裏御用品

—平安京左京北辺三坊五町の調査成果から—

加藤 雄太

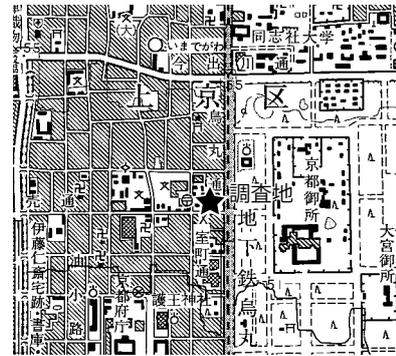
### 1. はじめに

今回紹介する資料は、当調査研究センターが1986年から1987年にかけて実施した府民ホールの調査で出土した御所の器である<sup>(注1)</sup>。平安京左京北辺三坊五町の調査の資料報告は、報告書の他に伊野近富氏によるみぞろが池焼に関する論考と、葵紋の京焼を扱った拙稿がある<sup>(注2)</sup>。いずれも江戸時代前期の資料であったが、今回は江戸中期から幕末における当地の位置づけを考えるうえで重要な資料であるいわゆる「禁裏御用品」について紹介する<sup>(注3)</sup>。

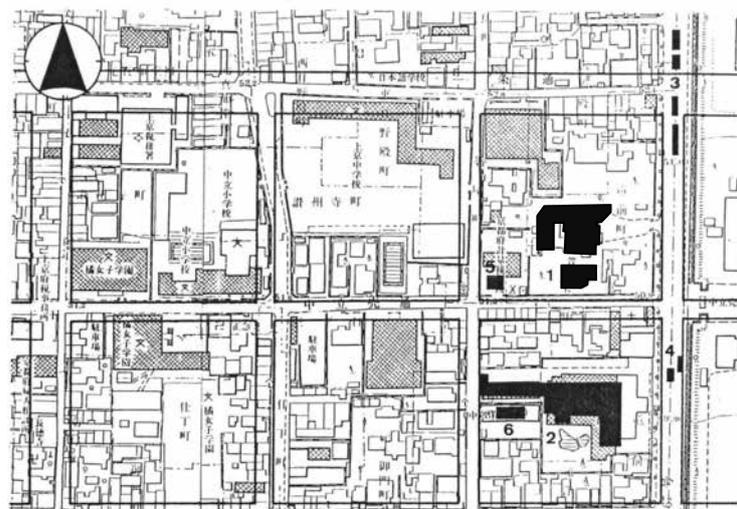
調査地点の所在地は京都市上京区烏丸通中立売通り上ル龍前町ほかにあたり、弥生時代前期は内膳町遺跡、平安時代には内膳町が中立売通り向かいの南側に営まれていた。当地はその後、里内裏が東辺に置かれ、中世後期にも連綿と人が暮らしを営んだ。天正14(1586)年には秀吉の聚楽第造営にともない多くの大名屋敷が建てられ、金箔瓦が葺かれたが、文禄4(1595)年に聚楽第は破却される。寛永16(1639)年には半井廬庵が住まいし、元禄年間(1688~1703)には「松平スルカ守」、寛保元(1741)年には東園家、勧修寺家が調査地付近に居を構えたようである。また、延宝6(1678)年には京焼の一種である「みそ路池焼」の内窯があったという。

### 2. 禁裏御用品

今回報告する肥前磁器は、報告書未掲載の資料である(第3図)。口径10.7cm、器高5.9cmを測る。体部外面に菊紋が描かれており、いわゆる「禁裏御用品」と呼称される資料と考えられ



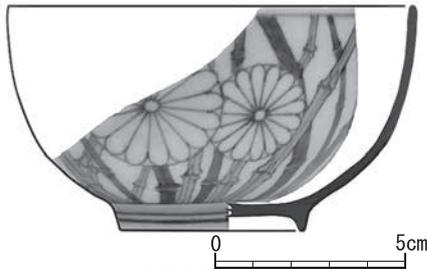
第1図 調査地位置図  
(S=1/25,000)



1.調査地 2.内膳町跡 3.一条大路(地下鉄烏丸線) 4.石垣溝(地下鉄烏丸線)  
5.内膳町遺跡(京都府計量検定所) 6.内膳町(京都府保育所)

第2図 調査地及び周辺遺跡位置図(S=1/5,000)

(伊野 1988を一部改変)



第3図 東園家邸跡出土の禁裏御用品 (S=1/2)

る。基本的に肥前磁器の中でも京都の限られた場所からしか出土しない希少な資料である。

池修氏の研究によると、肥前の限られた窯元で精製された禁裏御用品は毎年、新年に間に合わせるように、有田から京へ商人を通じて運搬されていた。天皇家の食膳のために用意された菊紋の描かれた精製品であることから今日「禁裏御用品」と呼称される。<sup>(注4)</sup> 天皇の使用する食

器は毎月朔日に未使用品と入れ替えられた。その際に「お下がり」として禁裏御用品が女官などに下げ渡され、その親族縁者関係に出回ったとされる。今回出土した禁裏御用品はこうして天皇家から公家に下げ渡された品である可能性がある。

この禁裏御用品に関して、その初期製品の定義に大橋康二氏は、4つの特徴をあげている。<sup>(注5)</sup> 1、材料が17世紀から18世紀前半の有田の上質磁器の呉須色調と通じること。2、碗・皿の高台内は無文であること。3、皿の裏文様は花唐草で梅花は二本の輪郭と濃みで塗り固められている。4、皿の場合、見込みに円圈の白抜きがあること。

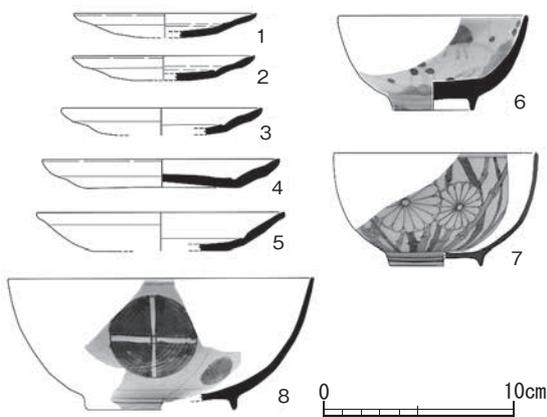
今回の資料は碗であるので3と4は該当しないが、鮮やかな色調の呉須に高台内無文であることが合致する。初期の禁裏御用品は菊が複弁であるのに対して宝永の大火の遺構資料が円圈を引いた中に十六弁の菊紋を描いていると指摘している大橋氏によれば、円圈内に菊を配する当資料は18世紀中葉から後半の生産品であると推測できる。

大橋氏が使用した資料は京都市埋蔵文化財研究所の京都御苑の調査成果を元にしており、<sup>(注6)</sup> 禁裏御用品の年代は共伴の肥前磁器から示している。

大橋氏は、同著で禁裏御用品を焼いていた窯元の辻家についても詳らかにしており、天皇の御用品を作る職人は無官であることが許されていないことから安永3(1774)年に常陸大掾源朝臣愛常の官位を受領していることを取り上げている。いかに禁裏御用品が同時代における特異性を持っていたのかがわかる事例である。

### 3. 出土地点について

当資料は天明の大火の焼土から出土したと調査の記録が残っていた。第4図には禁裏御用品と同じ出土状況の資料を一部ではあるが図化した。土師器皿はすべて皿Saに分類される。<sup>(注7)</sup> 1は土師器皿である。口径9.6cm、器高1.3cmである。底部から外反しながら立ち上がり、上半は内湾し、口縁端部が上方におさまり、体部から口縁部までが記号「~」状の形態を呈する。2は土師器皿である。口径9.6cm、器高1.3cmである。



第4図 禁裏御用品と共伴資料(S=1/4)

圏線が入り、体部から口縁部までが記号「～」状の形態を呈する。3は土師器皿である。口径10.6cm、器高1.4cmである。圏線に対応する外面が突起する。体部から口縁部まで「～」状を呈する。4は土師器皿である。口径12.4cm、器高2.0cmである。平底になっており、体部から口縁部まで「～」状を呈する。5は土師器皿である。口径13cm、器高2.0cmである。底部は平らで体部との境のやや上方に圏線を入れる。6は染付磁器である。雪輪草花文を描いた波佐見焼である。口径10cm、器高5.0cmである。8は染付磁器である。口径16cm、器高6.9cmである。肥前系の蓋つきの鉢である。内面の口縁には釉薬が施されていない。

これらの資料が出土した調査区域は龍前町内の北側調査区である。明治17(1884)年の『上京区地籍図 自16組 至20組』の17組に、龍前町の地籍図が記載されている。<sup>(注8)</sup>第5図とあわせてみれば、幕末まで龍前町には東園家の邸宅があった。龍前町の地籍図はその宅地範囲を示していると考えられ、禁裏御用品は東園家邸で出土したといえる。出土位置は、邸内でも裏手であることから、人目に付きにくいところで処理していたと推察される。

#### 4. 東園家

今回提示した資料の出土地点は公家の東園家が邸宅を構えた地点である。天明6(1786)年に描かれた「天明六年京都洛中洛外絵図」の加筆した黒枠内に「東園」の名前が確認できる(第5図)。

東園家は、その原点に藤原氏北家の中御門流をもち、持明院家の庶流である園家の傍流にあたる。園贈左大臣基任の二男東園左権中将基教を家祖とする。家格は左右近衛権少中將を経て参議や中納言・大納言に昇る武官の家柄の羽林家で、江戸時代に新たに興された新家にあたり、元和期に創立した。公家は禁裏小番を務める職務があったが、東園家はその中でも天皇の居所近くの内々にて小番を務めた内々の家である。有職故実と雅楽(琵琶)を家職とした。一条家の家令で家領は180石を数えた。

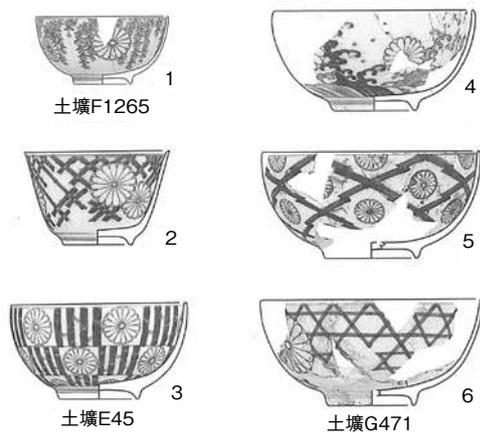
報告資料は天明8(1788)年の天明の大火で罹災して廃棄された。東園家の罹災時の当主は東園<sup>もととき</sup>基辰(1743～97)である。彼は安永8(1779)年までに正三位権中納言に昇進していた。室は花山院常雅の娘で、子に基治(1767～1780)と基仲(1780～1821)がいる。大火時45歳の基辰は、従二位である。息の東園<sup>もとなか</sup>基仲は天明2年に従五位下に任ぜられており、天明の大火後に無事元服を果たし、昇進していった。



第5図 天明年間の調査地周辺  
注8文献より一部加筆

#### 5. 公家屋敷出土の18世紀後半の禁裏御用品

京都では公家屋敷地の調査の事例があり、禁裏御用品の出土が確認されている。今回は平安京左京北辺四坊の18世紀後半の肥前磁器と共伴した資料を提示し、参考資料としたい<sup>(注9)</sup>(第6図)。1は菊御紋に藤花を描いた碗である。土壙F1265から出土した。2は菊御紋散に竹文の坏である。



第6図 京都公家屋敷跡出土の禁裏御用品  
(京都市埋蔵文化財研究所 2004)

器形は異なるものの用いているモチーフは当調査の資料と同じである。3は菊御紋竹霰文の碗である。霰文の間に菊紋を配する。いずれも土壌E45から出土している。4は菊御紋波文である。5は菊御紋松皮菱文の碗である。地文として用いられる松皮菱の間に菊紋を配する。6は菊御紋籠目の碗である。竹を荒く編み込んだ地文の籠目の上に菊紋を配している。4から6は土壌G471から出土した。いずれも菊紋が描かれ、同時代の同じテーマであっても非常な多様性を有していたことが看取される。

## 6. おわりに

禁裏御用品は有田で精製され、禁裏にて用いられた特殊な製品であった。今回紹介した資料は当地に公家が住まいしていたことから出土したと考えられ、京都の中でも限られた特殊性をもたらす資料として提示した。今後、禁裏御用品がどのような出土傾向を示すのかなど検討できる課題は多いように思われる。

(かとう・ゆうた=当調査研究センター調査課調査第2係調査員)

- 注1 伊野近富「平安京左京北辺三坊五町発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第27冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注2 伊野近富「京都市内出土の近世陶器」(『京都府埋蔵文化財情報』第68号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
- 注3 加藤雄太「平安京左京北辺三坊五町の葵紋の京焼について」(『京都府埋蔵文化財情報』第135号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2019
- 注4 池修『有職の文様』光村推古書院 2016
- 注5 大橋康二「将軍家献上以外の特別な意味をもつ肥前磁器二題-禁裏御用陶器と梅干用壺-」(『佐賀県立九州陶磁文化館 研究紀要』第3号 佐賀県立九州陶磁文化館) 2004
- 注6 『京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊 平安京左京北辺四坊』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004
- 注7 中屋啓太「常盤井殿町遺跡における近世の土師器皿・蓋について」『同志社大学歴史資料館調査研究報告 第8集 常盤井殿町遺跡発掘調査報告書-近世二條家邸を中心とする調査成果-』同志社大学歴史資料館 2010
- 注8 内務部第二課『上京区地籍図 自16組 至20組』1884(京都府京都学・歴史館 京の記憶アーカイブより)
- 注9 大塚 隆編『慶長・昭和 京都地図集成』柏書房 1994

## 参考文献

- 池修『御所の器』光村推古書院 2012
- 橋本政宣『公家事典』吉川弘文館 2010

## 11. みのやま 美濃山遺跡第8次

所在地 八幡市美濃山出島地内

調査期間 平成30年4月5日～平成31年3月6日

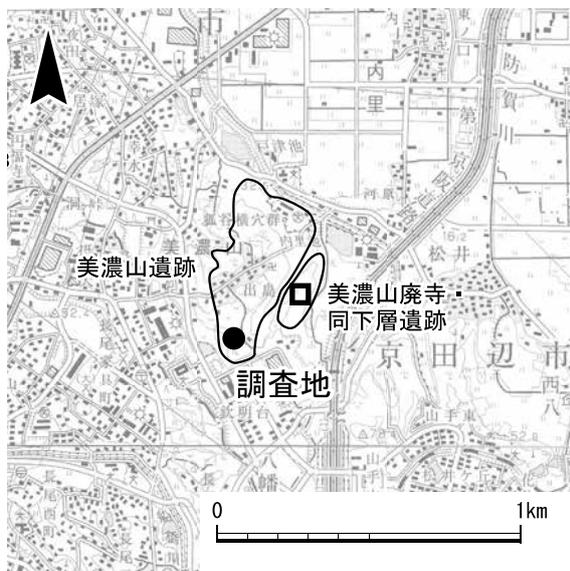
調査面積 6,600㎡

はじめに 美濃山遺跡は、八幡市南部の標高52mの丘陵上に位置する。新名神高速道路整備事業に伴い西日本高速道路株式会社の依頼を受け発掘調査を実施した。同事業に伴う美濃山遺跡の調査は、平成27年度(第5次)から継続して行っている。調査地より東方400mには、奈良時代の美濃山廃寺や、その下層においては弥生時代後期末～古墳時代初頭の竪穴建物群が検出された美濃山廃寺下層遺跡がある。

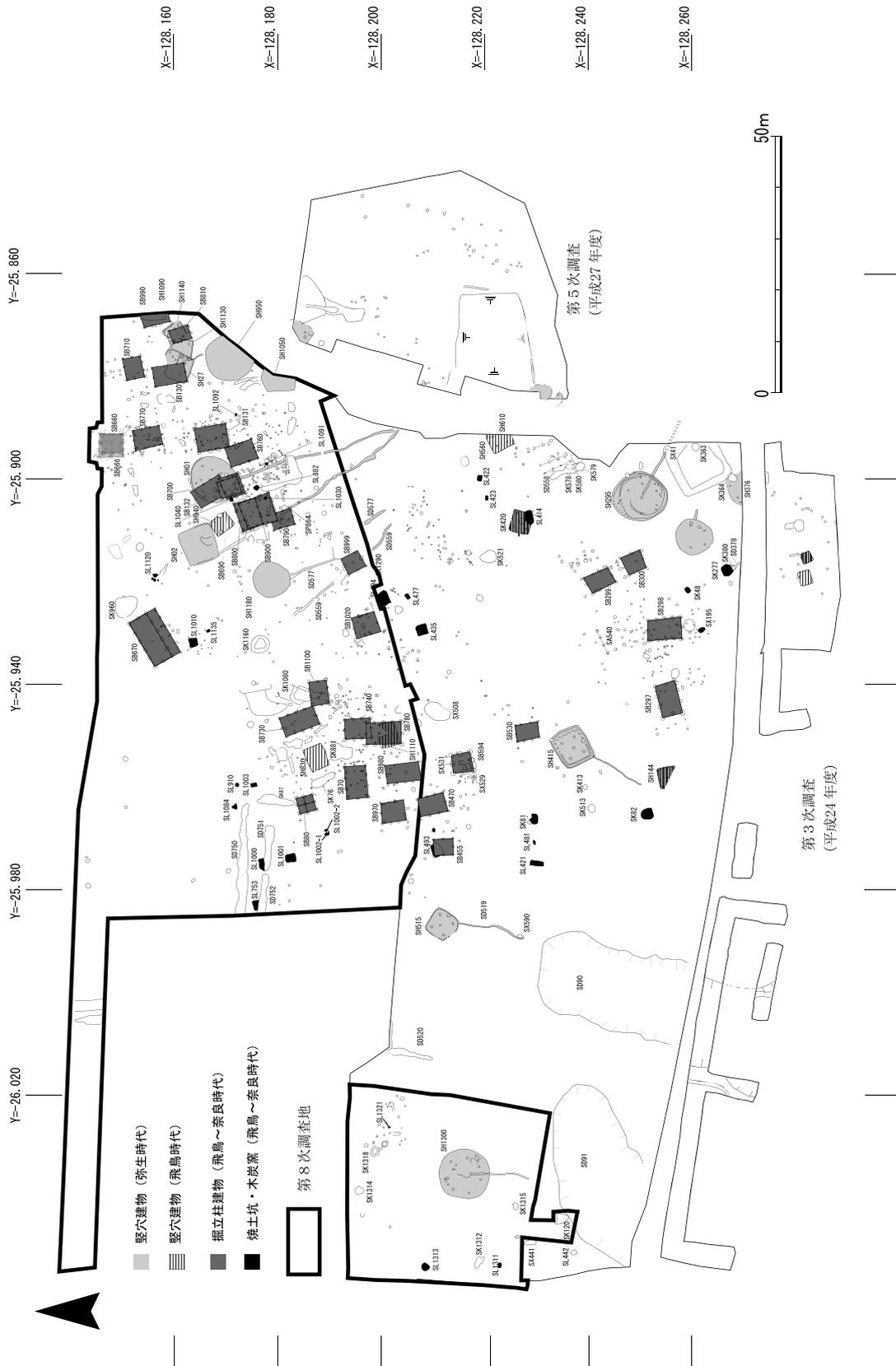
調査概要 今回の調査区は、第7次調査区の北側(対象地北東側1/4)、西端の北側の一部分が対象となった。調査地の現況は畑地であり、遺構は耕作土直下の地山面で検出した。遺構は調査区全体に広がっているが、高所部分となる北西側には遺構が希薄で、開墾により削平された可能性がある。

検出された遺構には、弥生時代後期末～古墳時代初頭にかけての竪穴建物・溝・土坑、飛鳥時代～奈良時代の竪穴建物・掘立柱建物・土坑・溝がある。そのほか、時期不明の遺構として焼土坑がある。

弥生時代 竪穴建物10基、土坑3基を検出した。竪穴建物は大型で円形・方形のものがあり、住居内より屋外に延びる屋外排水溝が設けられている。調査地東端で検出した調査区外の市道側に広がるSH950・1050・1090については、令和元年度に道路移設後調査予定である。SH01・1300は円形の竪穴建物で、SH01は直径7mから7.5m、直径9mへと2回の建て替えが行われ、中央土坑から南に約30mの屋外排水溝が掘削されている。SH1300は最も規模が大きいもので直径約9.7mを測る。中央土坑から南に14m残存する屋外排水溝を検出した。SH950は、床面に残る周壁溝から一辺6m×6.5mから6m×7mの方形の竪穴建物へ、その後直径約9.5mの円形の竪穴建物へと2回の建て替えが行われたと考えられる。そのほか、SH



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 淀)



第2図 検出遺構平面図

1180は支柱穴5か所が並び、屋外排水溝と考えられるS D577の延長部であることから、削平された直径6～7m程度の堅穴建物と判断した。同様に、西隣には屋外排水溝と考えられるS D559があるが、支柱穴は確認できなかった。方形堅穴建物S H02は、一辺6.5mから7.5mに建て替えが行われたと考えられる。建物南西角より屋外排水溝が南に40m掘削されている。S H27は、一辺6mの規模を測り、南東角より南に延びる屋外排水溝を2.5m検出したが、南側のS H950に切られる。

**飛鳥時代～奈良時代** 飛鳥時代と推定される堅穴建物4基、掘立柱建物27棟、土坑20基、道路状遺構を検出した。堅穴建物(S H830・940・1110・1130)は、弥生時代のものとは比べて一辺4m前後と小規模である。

掘立柱建物は調査地北東部に分布する7棟(S B130・660・666・710・770・810・990)、中央部に分布する9棟(S B131・132・690・700・760・790・800・900・999)、南西部に分布する9棟(S B70・80・730・740・780・970・980・1020・1100)、中央部北側のS B670の大きく4群に分布する。S B670を除く3群はそれぞれ8～12棟(南西部のものは第7次調査のS B455・470・594を含む)の建物で構成され建物が重複・近接していることから、同時期に存在していたのは数棟と考えられる。建物の多くは桁行3間、梁行2間のもので、中央・南西部の小群内には倉庫(2間四方)と推定される総柱建物S B80・999・594(第7次調査)が1～2棟含まれる。中央部北側の掘立柱建物S B670は、他の建物と空間を開けて単独で分布しており、規模もほかの建物に比べ大きく、廂を有した構造となり、他のものと異なる。

土坑は大型のもの4基(S K76・881・960・1080)、小型のもの16基を検出した。いずれも、不整形な平面形を呈し、大型のものは長さ4.5～6m、幅1.2～3.5m、深さ0.25～0.7mを測る。繰り返し掘削されたようで底面に凹凸が認められ、内部から須恵器・土師器が出土した。小型のものは1～2m前後のもので、削平が著しく浅いもので内部から小片化した須恵器・土師器が少量出土している。

**道路状遺構** 調査地西端で検出したもので、東西方向に並行する2本の溝S D750～752を確認した。溝は幅1.5～2m、深さ0.3mを測り、溝の間には3mの空間地がある。この並行する東西溝は、さらに西方向に延びている。これらは側溝と路面で構成される道路となる可能性がある。溝の検出面において、多くの土馬片が出土した。

**時期不明遺構** 調査地内の広範囲に点在し、土坑内部の壁面・底面が火を受けた焼土坑15基を検出した。焼土坑の規模は0.2～2.8mと幅があり、焼土の範囲も0.2m程のものから1m以上に及ぶものもある。焼土の硬化の度合いも異なる。第7次調査で焼土坑22基の形状から4タイプに分けられている。今回の調査で検出したものを分類すると以下のようになる。

a. 壁面が削平を受けているため、硬く焼け締った部分や被熱により赤色に変化した平坦な広がりのみを確認したもの(S L753・1000・1001・1002・1010・1030・1040・1084・1091・1092)。焼土の残存状況が異なるため、さらに細分できる可能性がある。小規模な焼土の広がりには鍛冶炉の下部の基礎部分の可能性もある。

b. 壁面が垂直に掘り込まれ焼け締るが、底面はほとんど被熱せず、炭・灰が堆積したもの(S L 882・1003・1311・1313)。これらは木炭窯と考えられ、S L 1003は内部に木炭が残存していた。樹種同定の結果、高カロリーが得られる松材が使用されていることが判明した。

c. 掘り込み壁面の傾斜が緩やかで、壁面・床面の両方が焼け締るもの、壁面は焼け締るが床面は被熱により赤色に変化したものの2種が認められる。今回の調査では検出されていない。

d. 小規模な掘形内に硬く焼け締った粘土があり、その外側に被熱により赤色に変化した部分が残るもの(S L 1084・1120・1135)。これらは鍛冶炉の可能性はあるが、内部埋土の水洗を行ったものの、鍛冶生産に伴う副産物の出土は、小鉄片と鍛造剥片を極少量にとどまった。

焼土坑の時期については、遺構の切り合い、周辺の遺構との関係から飛鳥時代～奈良時代の可能性が高いが、構造・用途については不明な点が多い。今後の調査区でも検出される可能性があることから、これらの調査結果、放射性炭素年代測定結果を待ち遺構の構造・用途、時期をまとめたい。

まとめ 今回の調査では、弥生時代～奈良時代にかけての竪穴建物・掘立柱建物・土坑・溝、時期不明の焼土坑などを確認した。

弥生時代においては、後期末～古墳時代初頭の竪穴建物10基のほか、土坑などを検出した。第5次調査以降、竪穴建物9基を検出しているので総数19基となる。美濃山廃寺下層遺跡では同時期の竪穴建物33基を調査しており、美濃山遺跡では最大3回の建て替え、美濃山廃寺下層遺跡では最大4基の竪穴建物が重複していることから、これらの集落は短期間で廃絶したとは考えにくい状況である。美濃山丘陵上の両遺跡の未調査部分も考慮すると広い範囲には数多くの竪穴建物が分布していると推測される。

飛鳥時代以降になると、丘陵上が大きく開発されることになる。まず数基の竪穴建物が丘陵上に建てられ、続いて飛鳥～奈良時代には広範囲に大きく4群に分かれて多数の掘立柱建物が建てられた。これらの建物群は、近接して建て替えられたと考えられ、それぞれの群には2～3棟の建物が飛鳥時代～奈良時代かけて連綿と存続していたものと考えられる。掘立柱建物は、ほぼ南北に建てられた桁行3間、梁行2間の小規模なものが多いこと、各群に倉庫と判断される総柱建物が付随すること、飛鳥時代を中心に土馬が多数出土していることなどから、一般的な集落とは異なる様相を示す。また、鍛冶炉を操業し鉄器を生産していたことや、多数の木炭窯が分布していることなどから、鉄製品などを生産する専門的な工人のムラの可能性がある。

出土したひさご形土製品は美濃山廃寺でしか確認されていない土製品であり、瓦片の出土とともに美濃山廃寺との物や人の往来を示すものである。美濃山遺跡の工人達は奈良時代には、美濃山廃寺に生産品を納めていたと考えられる。

今回の調査は、古代の工人が営んだ集落と古代寺院の関係を示す重要な成果を得ることができた。

(増田孝彦)

# 1. 木津川河床遺跡第32次

所在地 八幡市八幡菰池(洛南浄化センター敷地内)

調査期間 平成30年12月1日～令和元年7月30日

調査面積 3,000㎡

はじめに 本発掘調査は、木津川流域下水道洛南浄化センター建設工事に伴い、京都府流域下水道事務所の依頼を受けて実施した。

木津川河床遺跡では、昭和57年度から平成18年度までの調査によって、洛南浄化センター敷地内には弥生時代から古墳時代にかけての集落跡と中世の畑などが確認されている。

調査概要 3時期の遺構面を確認した。

室町時代には、東西方向の島畑3基と南北方向の島畑6基の合計9基の島畑を確認した。また、島畑の方向が変わる地点で南北方向の畦を1条検出した。この畦は当時の地割の坪境を示すと考えられる。そのほかに地震痕跡として噴砂を確認した。

鎌倉～室町時代の遺構としては、島畑の下層から素掘り溝群を検出した。島畑と同方向に掘られていたことから、地割も同じであったと考える。

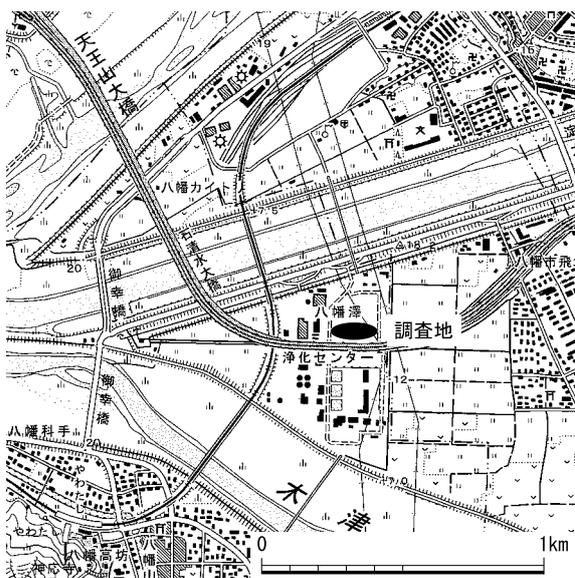
鎌倉時代以前のものとしては、平安時代～古墳時代初頭の遺物を包含する地層を確認した。その他、その層の上位から掘り込まれた南北方向の素掘り溝群を検出した。時期については不明で

ある。また、地震の液状化に伴う噴砂や、地形隆起を確認した。

まとめ 今回の調査で検出した耕作地は、石清水八幡宮の社領地の一部であったと考える。

地震痕跡については、良好な状況で確認することができ、地震のメカニズムと地中での様相を知ることができる事例となった。

(岡崎研一)

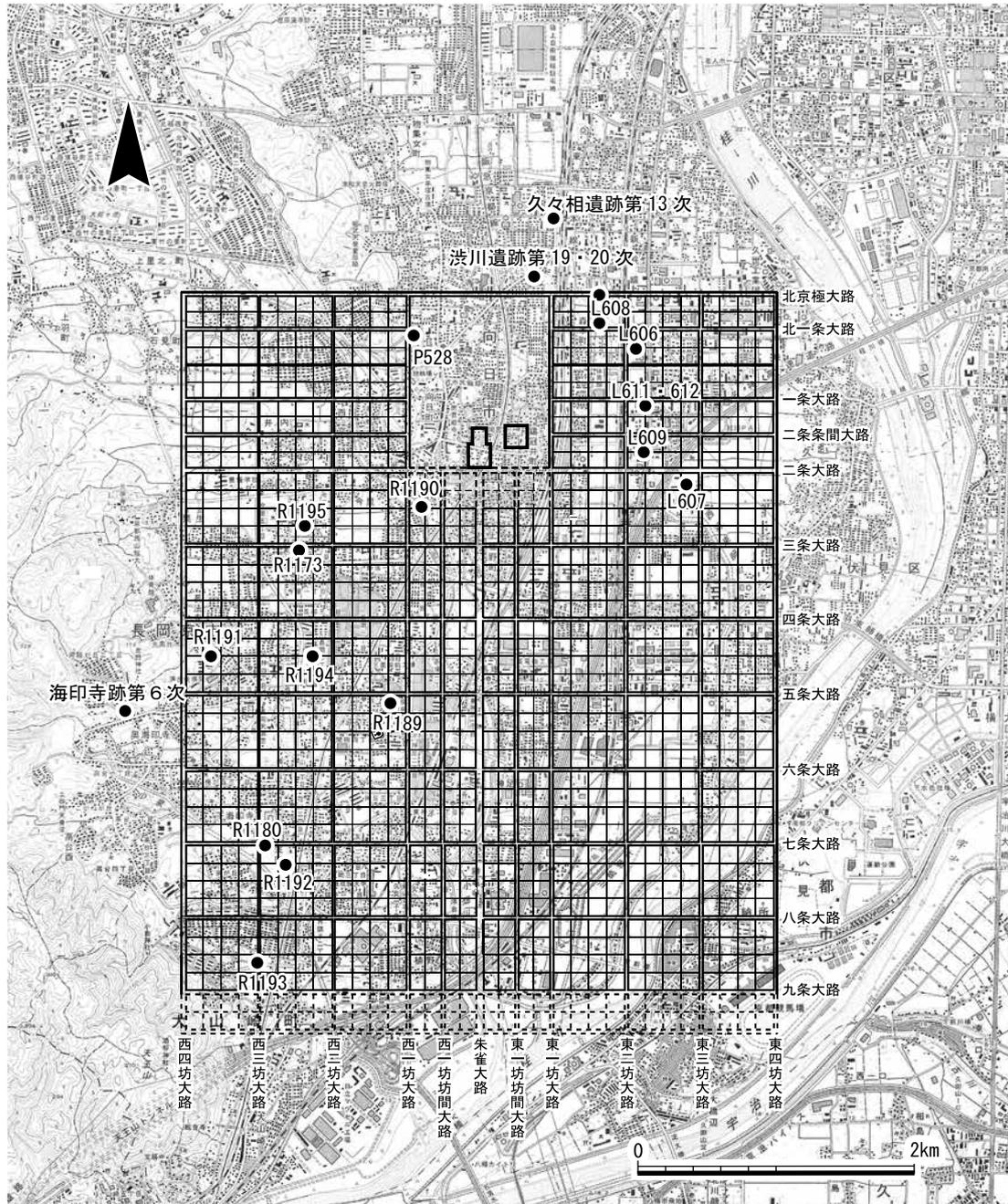


第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 淀)

## 長岡京跡調査だより・132

長岡京跡の発掘調査は、広域にまたがることから、向日市、長岡京市、大山崎町、京都市、当調査研究センターの各発掘調査機関が集まり、長岡宮・京の発掘調査情報の共有化のため、月に一度長岡京連絡協議会を行っている。

前年度3月から、今年度上半期の7月まで報告のあった、宮内1件、左京域6件、右京域8件、その他4件の発掘調査のうち、主なものについて報告する。



調査地位置図(1/50,000)

(向日市文化財事務所・(公財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図)

調査地はPが旧城、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。

**宮域** 宮域の調査は、上半期では1件のみ実施された。第528次調査地は、北辺官衙西南部の推定地で、縄文時代晩期の遺跡である中野遺跡の範囲内に位置している。これまでの調査でも、長岡京期の掘立柱建物や、弥生時代から古墳時代にかけての柵列などが検出されたりしている。今回の調査では、顕著な遺構・遺物が見つからず、後世の土地利用で、大きく改変されていたことが判明した。

**左京域** 左京第606次調査では、条坊に係る遺構として、調査地の中央部で一条条間北小路の南北両側溝を検出しており、この道路の幅が確定した。このうち、南側溝はあまり残りが良好ではなかったものの、長岡京期の軒丸瓦や平瓦・丸瓦、土師器や須恵器が出土している。また、左京一条三坊一・二町域でピットをいくつか確認したが、建物としてはまとまらず、ピットの性格等は明確にはならなかった。

左京第609次調査では、やはり条坊に係る遺構として二条条間南小路南北両側溝が見つかり、この道路幅が約26.4尺と確定した。遺物としては破片が多かったものの、長岡京期のものと判明している。それ以外に、凹み1基と溝5条を検出しているが、凹みからは長岡宮式の軒平瓦の平瓦部などが出土した。

**右京域** 8件の調査のうち、右京第1180次・伊賀寺遺跡の調査では、昨年度からの調査が継続されており、大きな成果を得ている。奈良時代末から長岡京期にかけての遺構に絞って述べると、掘立柱建物4棟、柵列3条、柱列1条、池状遺構1か所、井戸1基、掘り込み5か所、溝6条などが検出されている。掘立柱建物4棟は、真北から西へ約8°振った方向を基準にして、整然とした配置になっている。

また、柵列は池状遺構の東南部と重複している。全体的に、長岡京の条坊地割りと方向が一致していないものの、建物の一つが八条三坊十六町の宅地中軸に近い位置にあるなど、長岡京の条坊を意識して建てられていることは確実である。今回、出土した軒平瓦が長岡京遷都前に焼かれた瓦の特徴を示すことから、現在までの成果から見ると、遷都直前から遷都後間もない時期の高官の屋敷と考えられている。

右京第1194次調査では、西三坊坊間東小路の東西両側溝を検出している。この小路の幅は約9mであり、西側溝西側の七町の宅地で宅地内溝として西側溝と並行する溝を検出したが、東側の二町側の宅地では攪乱のため不明であった。

**その他** 旧乙訓郡域では、長岡京域や域外でも調査が行われている。

渋川遺跡第19・20次の発掘調査では、中世以前では溝、それより古い湿地堆積からは縄文土器片が出土している。今回の調査では長岡京期を中心とする遺構・遺物を検出することは出来なかった。

久々相遺跡第13次調査では、中世頃の条里の境になる里道の痕跡を確認している。しかも、里道の交差点付近で「胞衣壺」の埋納と、開元通宝の5枚セットが共伴しており、『医心方』『玉薬』に書かれた「胞衣壺」埋納の実例とみられる。

(土橋 誠)

## 現地公開（令和元年度上半期）

当調査研究センターでは、埋蔵文化財発掘調査の成果を広く府民の方がたに報告し、地域の歴史を理解していただくため、当調査研究センターが発掘調査を実施している京都府内の遺跡について、現地説明会や遺跡見学会などの現地公開を行っている。

### 現地説明会

**亀岡市犬飼遺跡** 6月16日(日)に開催した。今回の調査では、13世紀後半から14世紀前半に造られた居館を検出した。居館は、巨大な堀と自然の崖によって東西2か所に区画されていた。それぞれの区画では母屋と小さな建物を1棟ずつ検出した。また、堀からは瓦器椀や漆器椀、中国から輸入された天目椀や緑釉陶器などが出土した。これらの遺物は簡単に入手できるものではないことから地域の有力者が居住していたと考えられる。

当日は、206名が参加され、巨大な堀や遺物に感心しながら見学された。

**亀岡市金生寺遺跡** 8月24日(土)に開催した。今回の調査では、13世紀の掘立柱建物4棟や土坑などを検出した。犬飼遺跡よりもやや古い時期の集落と考えられるが、堀などを持たないことから犬飼遺跡のような有力者が居住するような集落ではなかったと考えられる。

当日は、92名の方が参加された。

**城陽市芝山遺跡・芝山古墳群** 8月31日(土)に開催した。今回の調査では、古墳時代中期後半から後期前半にかけての古墳6基のほか、飛鳥時代の竪穴建物や奈良時代の掘立柱建物などを検出した。検出した古墳のうち埋葬施設が遺存していたものは、いずれも木棺直葬であり、須恵器や土師器、鉄製品などが副葬されていた。古墳時代後期になると、多くの古墳群で横穴式石室が採用されるが、芝山古墳群では古くからの木棺直葬が引き続き採用されている点が注目される。今回の調査は、南山城地域における古墳時代の墓制を考える上で重要な調査となった。

当日は、晴天に恵まれ、197名が参加され、遺構や遺物を熱心に見学された。

(筒井崇史)



亀岡市犬飼遺跡現地説明会



城陽市芝山遺跡・芝山古墳群現地説明会

## 普及啓発事業（令和元年度上半期）

当調査研究センターでは、文化財活用の一環として埋蔵文化財の発掘調査成果や最新の研究成果を分かりやすく紹介し、府民の方がたに文化財に対する理解をいっそう深めていただくため、埋蔵文化財セミナーや発掘調査速報展をはじめ、「関西考古学の日」関連事業、向日市まつりへの参加などの普及啓発活動を行っている。



第141回埋蔵文化財セミナー会場風景  
（於：ガレリアかめおか）

### 第141回埋蔵文化財セミナー

6月15日（土）に亀岡市ガレリアかめおかにおいて開催した。

今回のセミナーでは、「丹波の古代寺院を探る！－新たな寺院発見か！？－」と題し、亀岡市佐伯遺跡で出土した大量の瓦類の存在から新たな寺院の可能性を探るとともに、亀岡盆地の古代寺院の様相を再検討し、多くの寺院が営まれた歴史的意義に迫ることを目的とした。

当調査研究センターの浅田洋輔調査員からは、「瓦と瓦塔から見た古代寺院－佐伯遺跡の調査成果を中心に－」として、佐伯遺跡の発掘調査について、大量に出土した瓦類と、瓦塔、遺構について詳しく報告し、寺院の可能性に迫った。

亀岡市教育委員会の樋口隆久文化財専門官からは、「亀岡盆地における古代寺院建立」として、これまでに亀岡盆地で確認された古代寺院の概要について詳細な報告をしていただき、亀岡盆地における仏教の広がりを具体的に示していただいた。

京都大学名誉教授で、当調査研究センターの上原真人理事からは、「丹波国における律令制成立期の寺院－山背と対比しつつ－」として、佐伯遺跡の造営時期についての見解や山背国北部の古代寺院との対比などを中心に講演していただいた。

当日は、京都府内外から128名の方が参加され、盛況のうちに終了した。

### 発掘された京都の歴史2019 まぼろしの古代寺院

府民の方がたに埋蔵文化財についての理解や関心を深め、遺跡・遺物に親しんでいただくことを目的に開催したもので、8月3日（土）から8月25日（日）まで向日市文化資料館で開催した。ま

た、本展覧会は府内巡回展として、9月4日(水)から9月16日(月・祝)まで京都府立丹後郷土資料館で、9月28日(土)から10月14日(月・祝)まで京都府立山城郷土資料館で開催する。

昨年度の発掘調査成果を中心とした速報展は「発掘された京都の歴史2019」と題して、当調査研究センターを含む府内各調査機関が実施した22遺跡についての調査成果を紹介した。また、企画展として「まぼろしの古代寺院」の展示を行った。先の第141回埋蔵文化財セミナーでも取り上げた亀岡市佐伯遺跡出土の瓦や瓦塔を中心に京都府内の古代寺院8か所に関する資料を展示した。各地の寺院の軒瓦を集め、文様の比較などが行えるようにするとともに、府内出土の瓦塔3点を一堂に会する展示を行った。

#### 夏の考古学体験講座「勾玉をつくろう」

8月6日(火)から8月8日(木)にかけて、乙訓管内の小学4年生以上を対象として実施した。参加者は向日市文化資料館の常設展で展示されてい

やまびらきる山開古墳出土の子持ち勾玉を見学し、その後、勾玉づくりを体験した。参加者は、石材を苦労しながら勾玉の形状に研磨し、最後に着色をして仕上げた。

#### 京まなび教室特別講師派遣事業「勾玉をつくってみよう」

8月23日(金)に、長岡京市立長法寺小学校において、高学年を対象として勾玉づくりの出前講座を行った。当日は保護者等も含めて11名の参加があった。この講座は、京都府教育委員会の「京まなび教室等特別講師派遣事業」による依頼を受けて実施したものである。当日は、職員から勾玉についての説明を受け、参加者は自分好みの勾玉づくりに励んだ。

(筒井崇史)



夏の考古学体験講座「勾玉をつくろう」  
(於：当調査研究センター)



京まなび教室特別講師派遣事業  
「勾玉をつくってみよう」  
(於：長岡京市立長法寺小学校)

## センターの動向

(平成31年3月～令和元年8月)

- |   |    |   |
|---|----|---|
| 3 | 19 | 第29回理事会(於：京都市)  |
|   | 20 | 長岡京連絡協議会  |
| 4 | 8  | 木津川河床遺跡(八幡市)現地調査開始                                    |
|   | 10 | 新名神美濃山遺跡(八幡市)現地調査開始                                   |
|   | 12 | 国営亀岡犬飼遺跡(亀岡市)現地調査開始                                   |
|   | 16 | 平安京跡(京都市)、新名神保安塚(宇治田原町)現地調査開始                         |
|   | 22 | 新名神芝山遺跡・小樋尻遺跡(城陽市)現地調査開始                              |
|   | 24 | 長岡京連絡協議会  |
| 5 | 15 | 国道423号犬飼遺跡(亀岡市)現地調査開始、国道24号寺田拡幅水主神社東遺跡(城陽市)現地調査開始     |
|   | 22 | 長岡京連絡協議会  |
|   | 22 | 新名神奥城土遺跡(宇治田原町)調査開始                                   |
|   | 28 | 新名神保安塚(宇治田原町)調査終了                                     |
|   | 30 | 国道24号寺田拡幅小樋尻遺跡(城陽市)現地調査開始                             |
| 6 | 4  | 第30回理事会(於：京都市)  |
|   | 10 | 上原理事・菱田理事国営亀岡犬飼遺跡(亀岡市)現地指導                            |
|   | 15 | 第141回埋蔵文化財セミナー「丹波の古代寺院を探る！－新たな寺院発見か！？」(於：亀岡市、参加者128名) |
|   | 16 | 国営亀岡犬飼遺跡(亀岡市)現地説明会(参加者206名)                           |
|   | 19 | 増田理事木津川河床遺跡(八幡市)現地指導                                  |
|   | 20 | 井上理事長国営亀岡犬飼遺跡(亀岡市)現地指導                                |
|   | 21 | 第9回評議員会(於：京都市)  |
|   | 26 | 長岡京連絡協議会  |
| 7 | 1  | 新名神長井野塚(宇治田原町)調査開始                                    |
|   | 3  | 増田理事国道24号寺田拡幅水主神社東遺跡・新名神小樋尻遺跡(城陽市)現地指導                |
|   | 19 | 木津川河床遺跡(八幡市)関係者説明会(参加者14名)                            |
|   | 23 | 新名神奥城土遺跡(宇治田原町)調査終了                                   |
|   | 24 | 長岡京連絡協議会  |
| 8 | 3  | 「発掘された京都の歴史2019」開始(於：向日市文化資料館、～25日)                   |
|   | 6  | 「勾玉をつくろう！」(参加者154名、～8日)                               |
|   | 6  | 新名神長井野塚(宇治田原町)調査終了                                    |
|   | 21 | 長岡京連絡協議会  |
|   | 22 | 役員協議会(於：向日市)  |
|   | 23 | 京まなび教室等特別講師派遣事業「勾玉をつくってみよう」(長岡京市立長法寺小学校、参加者11名)       |
|   | 24 | 国営亀岡金生寺遺跡(亀岡市)現地説明会(参加者92名)                           |
|   | 25 | 「発掘された京都の歴史2019」終了(於：向日市文化資料館、参加者1,885名、3日～)          |
|   | 31 | 新名神芝山遺跡(城陽市)現地説明会(参加者197名)                            |

### 編集後記

厳しい夏もようやく終わり、すがすがしい秋の気配が感じられる季節になりました。ここに『京都府埋蔵文化財情報』第136号が完成しましたので、お届けします。

本号では、昨年度の京都府内の埋蔵文化財の調査について、全体的なまとめを行い、あわせて共同研究の報告や、職員が日ごろの調査・研究で扱った資料の紹介も併せて掲載しました。ご味読いただければ幸いです。

なお、当調査研究センターは、令和2年度、設立40周年をむかえます。記念事業として展覧会や講演会などを計画しています。

(編集担当 土橋 誠)

### 京都府埋蔵文化財情報 第136号

令和元年10月31日

発行 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>



印刷 中西印刷 株式会社

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入ル

Tel 075-441-3155 (代) Fax 075-417-2050



KYOTO  
ARCHAEOLOGY CENTER